

『宮城・南三陸町へ』 南三陸町復興ボランティアツアー3日間 (2011.11.25~11.27)



【ツアーについて】
 今回の企画は、これまでボランティア活動に参加したいけれど、何をどうしてよいかわからない方や、支援をしたいけど体力的・年齢的に不安を感じている方にお勧め出来るボランティアツアーです。

宮城復興支援センターの全面協力のもと、
「会話によって心のケア」を行ったり、
「お買物を通して経済支援し、雇用にも繋がる支援の一部」を行います。



1日目は、青森空港から「奥入瀬溪流」と「十和田湖」を観光して、大湯温泉に宿泊します。
 今回は大寒波の影響で途中の八甲田山も暴風雪でした。



2日目朝8時、前日の大雪とは違い晴天となりました。
 午前中は6月に世界文化遺産に登録された「平泉中尊寺」を観光。中尊寺は紅葉のピークを迎え(例年より約3週間遅れ)、沢山の観光客が訪れていました。

その後、今回の主目的地である「南三陸町」へ向かいます。



途中今回は、登米市にある宮城復興支援センターの支部(ベース基地)を訪れ、震災当時の支援状況について、事務局長の船田氏からご説明いただきました。

説明のあとは、毎週水曜日に仙台⇄南三陸町間の約100kmを被災者の方々に對して全国からの支援金により、無料で運行している、宮城復興支援センターの名前が塗装された、「ラッピングバス」に乗って南三陸町へ向かいます。



南三陸町到着。言葉が出ませんでした・・・。

肉眼で見る目の前の光景は、テレビで見た映像とは違い、想像を超えたものでした。
 印象的だったのは、数ヶ月前にテレビで見た、屋上に「SOS」の文字が書かれていた志津川病院。建物にはまだ漁船が突き刺さっていました。

「復興は何パーセント進んでいるのか？」の質問に対する答えが「10パーセント以下」である事がよく理解できました。被災された方々は「数ヶ月前よりはボランティアをはじめ自衛隊のおかげですごく片付いた」とおっしゃっていましたが、まだまだ瓦礫の山が多く残っています。

現在も毎日約200名(震災直後は毎日約500名)のボランティアの方々が瓦礫の撤去を行っていらっしゃいます。まだまだ時間がかかることを実感しました。



その後、ツアーの目的である、「経済支援」と「心のケア」のため、南三陸町の吉野沢仮設住宅を訪ねました。

震災から8ヶ月以上が経過し、これから震災と同じ冬の季節を迎えるにあたって、被災地では心のケアが必要です。特に一人住まいの方は、寒さを理由に自宅にこもる等、孤独にならないような配慮が必要だと身に染みて感じました。

「遠いところからよく来て頂きました。」「九州では被災地のことはどのように伝わっているのですか?」「震災を風化させないで欲しい」「私たちは忘れられていないんだ」など様々な会話が飛び交っていました。また、復興仮設マーケットも賑い、参加者の皆様は心のこもった手作りの手芸品などを購入され、被災者の方々にはそれに応えるように、「寒いので・・・」と、温かいお茶などを振舞って頂きました。最後に、吉野沢の自治会長様が、涙ながらに御礼のお言葉をくださったのが特に印象的でした。

そして、今回は仮設住宅にお住まいのお宅にて、震災当日から数ヶ月後に至るまでをホームビデオカメラで撮影された映像を拝見しました。映し出された度重なる映像には、言葉が出ませんでした。

仮設住宅でのふれあいを終え、ホテルに戻り、今度は別の被災者の方々と夕食を頂き、現状の課題などについてお話を聞かせて頂きました。

特に印象的だったのは、ある方に「今、何の支援が必要ですか?」と訪ねると、
「お金・モノも正直大事ですが、私たちが全国の方から忘れられていないことが実感できるように、沢山の方に何度も来て欲しい」という回答でした。



ツアー3日目の午前中は、震災前には4棟あった工場のうち、3棟が津波に流された水産加工工場「マルアラ(株)及川商店」を訪ね、当時の様子など説明を頂きました。見学後は試食をさせて頂き、品物の直売も行いました。今後、九州でも宮城県南三陸産の商品を購入して頂く事が、この地方での今後の雇用をはじめとする経済支援につながることを実感しました。



最後に、旧防災庁舎を訪れました。

ここは最後まで津波発生情報を放送しながら津波に流された若い女性の方をはじめ、約30名の役場の方が犠牲となった建物です。町長は一番右の写真の鉄塔(約19m)にしがみついで助かりました。私たち自身がここに身をおくことで今回の震災がとてつもない脅威であった事を体感しました。



仙台駅に向かう前に、同じく津波の被害を受けた「荒浜地区」を訪れました。当時、上空から津波がものすごいスピードで平野を襲う映像が流されていた場所です。まだ自転車の瓦礫の山や車などが無残な姿で残されていました。

今回のツアーでは、小さなことでも被災地に力を与えられることが改めて分かりました。例えば、隣の人に今回の震災について声をかけることで震災を風化させないこと、また、東北産の商品を買うことが現地の雇用にも繋がることなど、私たちの日常生活の中からも支援ができるのです。最後に、被災者の方がおっしゃっていた、
「私たちが全国の方から忘れられていないことが実感できるように、何度も来て欲しい」の言葉どおり、西日本に住む私たちが現地を訪れ、東北を元気にしていきたいと思えます。